

2019 年度入学式 学長式辞

今朝、創立 70 周年の記念フラッグがはためく埼玉大学キャンパスでは、皆さんを歓迎するかのよう、まだまだ頑張っていて咲いてくれている桜の淡い色と、木々の新しい芽や若葉のもたらし柔らかな緑が調和し、美しく輝いています。このように春の装いが一段と進み、希望に満ち溢れた今日の良き日、ここに埼玉大学入学式を迎えられた 1,666 名の新入生の皆さん、入学おめでとうございます。埼玉大学の教職員と在学学生 7,700 名を代表し、学長として、皆さんの入学を心から歓迎します。また、ご家族の皆様方にも、深く敬意と祝意を表します。

今年、創立 70 周年を迎えた埼玉大学は、1949 年 11 月 3 日に開学式を挙げています。旧制浦和高校を母体とする文理学部と埼玉師範学校を母体とする教育学部を 2 キャンパスに配置し、入学定員 1,200 人でのスタートでした。爾来 70 年の歴史を辿り、いくつもの分岐点が繋がった埼玉大学の時間軸は、紆余曲折に今に至ります。現在は、教養、経済、教育、理、工の 5 学部と、人文社会科学、教育学、理工学の大学院 3 研究科から成り、入学定員は 2,157 人にまで増えました。そして、これまでの埼玉大学卒業生は 86,622 人に及びます。

埼玉大学の全てが集まる今のキャンパスには 50 年前に移転し、1970 年からこの地で講義が始まっています。私は 1971 年に当時の理工学部建設基礎工学科に入学し、大学生としての 4 年間で埼玉大学で過ごしましたが、当時は、緑はといえば入口を入って右にある僅かな原生林だけで、北浦和駅をつなぐバスが構内中心部を発着するなど広々としており、建物が並ぶだけのやや殺風景なものでした。それが今や四季折々に美しく緑豊かな、そして私の大好きなキャンパスになっています。これは、私の恩師であり、第 5 代学長の岡本舜三先生が、40 年前に植えた木々が育ってできたものです。木々の成長は、時の流れという時間軸の重みと、初動という時間軸原点の大切さを教えてくれます。皆さんは今、それぞれに決意も新たに大学での生活を思い描いていることと思います。今日の入学という節目、大学生としての初動を原点として大切に、新たな時間軸に沿って歩みを進めて、大きく成長して下さい。そして、時としてキャンパスにも目をやり、ふと、その美しさを感じてほしいと思います。

今、埼玉大学の掲げるビジョンは「埼玉大学 All in One Campus at 首都圏埼玉～多様性と融合の具現化」。文系、理系、教員養成系の多様な学問が、日本人、外国人、社会人の多様な学生と教職員が 1 キャンパスに集う埼玉大学。知の府としての基盤強化と、首都圏埼玉に根ざした個性化を 2 軸とした機能強化により一層輝きを増します。第 1 の軸は、大学の主たる使命が知の創造と継承であることを据えた、研究力と人材育成力の強化という知の府としての基盤強化です。また、第 2 の軸は、地域活性中核拠点として、産学官連携による地域課題解決と地域ニーズに応じた人材育成を進めるという埼玉大学としての個性化です。埼玉大学は、多様性を尊重しつつシナジーをもたらす「多様性と融合の具現化」を進めます。

埼玉大学創立 70 周年のキャッチフレーズは「つなげよう未来へ」。この 3 月に教養学部を卒業した上村真由さんの作です。このフレーズに込めた彼女の思いは、「あらゆる立場の人をつなぐ架け橋であることが埼玉大学の魅力。たとえば、留学生と日本人学生、同窓生と現役学生、地域の人と埼大生がつながっています。この 70 年間の人と人の心をつなぐ役割を未来へつないでほしい。」学長として、とても嬉しいメッセージです。上村さんは 4 月から共同通信社に入社、シンガポールで勤務しており、これからは同窓生として埼玉大学の歴史をつないでくれるものと思います。そして、新しく埼大生となった皆さんには、主役の現役学生として、多様性豊かな埼玉大学で人とつながり、その歴史をさらにつないで下さい。

皆さんが同窓生とつながるべく、埼玉大学卒業生の活躍を紹介します。それは学術、文化、芸術の各分野に及び、まさに「All in One Campus」と「多様性」を掲げる埼玉大学の本領発揮です。彼らはみな、後輩に向けたメッセージの中で、出会いの大切さを教えてくれます。

一人目は、2015年ノーベル物理学賞を受賞された梶田隆章さん。理学部を1981年に卒業し、東京大学大学院に進学しています。お話を伺った際、「本当に物理学の研究を志したのは大学院生の時。幸運なことに、良い師、仲間、研究プロジェクトに出会いました。」と語っています。彼の「出会い」には観測データとの出会いも含まれます。観測データと計算値とのずれに気付く、その解明に専念してニュートリノ質量の発見につながったとのこと。そして、こう続けます。「大学は学問の入口。いつ人生を決めるような、大切な出会いがあるか分かりません。広く目と心を開いて、大切なものに出会ったときのための準備をして下さい。」

二人目は、妖怪研究の業績で2016年文化功労者に選ばれた小松和彦さん。1970年、教養学部の卒業です。在学中に文化人類学という学問と恩師に出会い、埼玉県両神村でのキツネつきに関する調査をきっかけとして研究者の道を歩み、現在は国際日本文化研究センターの所長を務めています。埼玉大学での講演の際に、「研究はつらくても、同時に楽しい謎解き。まずは、楽しむことを一番の柱にして頑張ってください。」と語っていたことが印象的でした。そして、「埼玉大学に来なかったら、今の研究はしていなかったかも知れません。チャンスを見つけ自分の道を切り開き、社会で活躍してほしい。」と、出会いの大切さにも触れています。

三人目は、2016年度日本芸術院賞を受賞され、2018年に日本芸術院の会員に推挙された洋画家、根岸右司さん。1961年、教育学部の卒業です。在学中に生涯の師となる渡邊武夫先生に出会い、埼玉県立浦和高校などで美術の先生を務めながら画家として活躍され、雪景色の油彩の名手として知られています。昨年の入学式で講演頂いた際、「4年間を過ごした男子寮で他学部の仲間と寝食を共にした経験がその後の人生に大変役に立ちました。」と、仲間との出会いの大切さを語っています。因みに私は、時期はずれるものの浦和高校時代に美術部でしたので、根岸先生とは埼玉大学以外でもつながり、人のつながりの妙を痛感しています。

私のキャリアも埼大生時代の恩師との出会いによります。先の岡本舜三先生には構造物の振動現象に興味を抱かせて頂き、研究者の道へと導いて頂きました。また、秋山成興先生は構造力学の本質を教えてください、「卒業生が大学に戻って大学のために尽くすべき」と、教員として私を埼玉大学に呼び戻して下さいました。そして、第8代学長の堀川清司先生からは学長補佐として多くを学びました。これらの出会いが私の時間軸の大きな分岐点です。

このように、埼玉大学には多様な先生や多様な学問と出会う環境があり、時間軸上、脈々と続いています。皆さんにはこの環境を活かし、自身の出会いを具体的なものとして下さい。

さて、過去の話が続きましたので、これからのAIやデータ社会が中心となる未来において皆さんが活躍する姿も想定し、大学における学びの在り方などについて考えてみましょう。まずは、英語の文章を紹介することから始めます。

When a dog bites a man, that is not news because it happens so often. But if a man bites a dog, that is news. これは、イギリスのジャーナリストで新聞王と呼ばれた Alfred Harmsworth (1865-1922) の言葉です。犬が人を噛むことはあり得る話ですが、その逆が起こったらニュースになる、と報道界でたとえられている有名な話だそうです。この話はデータ社会や AI とどのように向き合うかを考える際にも引き合いに出されることがあります。

「犬が人を噛んだ」と「人が犬を噛んだ」。この2つの文章データは、字数も文字の種類も全く同じですが、あり得ない情報を与えるデータには価値があり、その意味で情報量として大きいのは後者、つまり「人が犬を噛んだ」です。データから価値を見出し、考え、役に立つ情報を作り出すのはAIではなく、やはり人間ということになります。

このことは、私も含め研究者が常に心がけていることです。たとえば、ノーベル賞を受賞した梶田隆章さんの場合、先程も紹介しましたが、スーパーカミオカンデの観測データの中に計算値とずれた、言わば「人が犬を噛んだ」的なデータを見出し、そのデータを価値あるものと考えて研究に専念、それがニュートリノ質量の発見をもたらしました。そして、先程の言葉につながるのです。「いつ、人生を決めるような大切な出会いがあるか分かりません。広く目と心を開き、大切なものに出会ったときのための準備をして下さい。」人間ならではの価値を見出す考えと判断、AIには真似できないと思いませんか。

AIと向き合う際にもう一つ重要なことは、AIの判断を鵜呑みにしないことと言われます。たとえば、郵便番号によるはがきの仕分けはAIにより自動化されていますが、その自動化のためには大量の手書き画像データだけでなく、それぞれに付けられた、正しいか誤りかの正誤ラベルが必要で、それを基にAIは識別ルールを見出します。したがって、正誤ラベルでの人間のミスがAIの間違った結果にもつながり得るわけで、AIの判断に対して最終的に人間の思考、つまり考えることが重要です。ここで思い出すのが、昨年、2018年のノーベル医学生理学賞を受賞された本庶佑先生の言葉です。「研究に関しては、僕は簡単に信じない。雑誌、ネイチャーに載っているものの9割は「ウソ」で、10年経って残るのはせいぜい1割。自分の目で確信できるまでやるのが僕の基本。つまり、自分の頭で考えて納得できるまでやる。」

ノーベル賞を受賞できる、できないは別として、研究、および研究を通じた教育、つまり大学での学びは、人間らしく自分の目でものを見て、自分の頭で考え判断するという、昔ながらの普遍的なことであるように思えます。人間はサルと違い、多くが集まって飲食を共にし、会話を楽しむとされます。結局、多様な人と人がつながることが人間らしく考えることの原点であるように思うのですが、いかがでしょうか。

では、具体的にどうやってこの「考える」ことを行ったらいいのでしょうか。東京大学の梶谷真司教授が著書「考えるとはどういうことか：0歳から100歳までの哲学入門」（幻冬舎新書、2018年）の中でとても示唆に富む話をされていますので、それを引用しながら考えてみましょう。哲学が主題の本ですが、人間らしく考えるという点では同じかと思います。

梶谷教授によれば、哲学とは問い、考え、語ることだそうです。私たちは、「問う」ことではじめて「考える」ことを開始します。つまり、思考は疑問によって動き出すのです。しかし、頭の中で考えていても、ぼんやりと浮かんでは消えるだけなので、「語る」ことが必要になるとのこと。きちんとした言葉で語ることで、考えていることが明確になります。この「問い、考え、語ること」としての哲学において、もっとも重要なのは問うことで、「問い」こそが、思考を哲学的にすると言います。これは、Albert Einstein の名言「The important thing is not to stop questioning; curiosity has its own reason for existing.」にもつながります。問い続けることで考えることが広がり、違った角度からものを見られるようになりますが、では、どのように問えばいいのでしょうか。思考の質を高めるには問いの質も高いほうがいいのですが、とりあえずは何でもいいから問えとのこと。「何でだろう?」とか「どういうことだろう?」といった、繰り返し浮かぶ疑問を大切にすること、つまり好奇心が重要です。

この「問い」と知識との関係についても梶谷教授は言及しています。彼は言います。「知識だけ学んでも問うことがなければ、思考はどこにも行かず、育つこともない。知識もなしに問うばかりでは、思考は方向を見失う。知識はそこからさらに問うてこそ意味があり、問いは知識によってさらに発展する。」と。皆さんはこれまで、知識を得ることを目的として学び、与えられた問題を解くために知識を使い、考えることを主としてやってきたように思います。この「問題を解くために考える」はAIが得意とし、人間は与えられた問題を考えさせられるのであって、自分で問い、そこから自分で考えることとは全く違うとも指摘されています。

考えるために必要なもう一つ、「語る」についてももう少し考えてみます。多くの人にとって、一人で考えても、途中で行き詰まり、堂々巡りするだけです。他の人に語りかけ、応答してもらえれば嬉しいし、思考はより深く、豊かになります。したがって、単なる「語る」ではなく「聞く」も含めた他者との「対話」が意味を持ちます。「対話では、さまざまな人がそれぞれに異なる立場、視点から物事を眺め、語るがゆえに、おのずとももの見方や考え方が広がり、深まっていく。そこでそれまで自分を縛っていたものに気づき、そうではない可能性を考えられるようになる。」と梶谷先生は言います。このことは、「多様な人と人がつながることが、人間らしく考えることの原点である」と、先程、私が述べたことにつながります。

これからは知識集約型社会と言われます。幅広い知識だけでなく、柔軟な思考力に基づく判断が一層重要となります。そして、これまで考えてきたように、知識は課題を解決しようとする思考と行動に結びついた時に初めて意味を持ちます。このことは、ゲーテも言っています。"Knowing is not enough; we must apply. Willing is not enough; we must do." そして、ゲーテは思考に関しても言葉を残しています。それは、"Thinking is more interesting than knowing, but less interesting than looking." ただ、ゲーテは同時に、"We only see what we know."とも言い、見ることの難しさも指摘しています。見えるものを捉える時、自分でフィルターを掛け、目の前に見えているのに見ない、自分が見たいものだけを見てしまいます。

今日の入学式では、特別講演として、埼玉県の上田清司知事にお話し頂きます。埼玉大学は県内唯一の国立大学として埼玉県と様々な形で連携し、一緒に地域活性化を進めています。そのような関係にあって、上田知事には、単に私が学長としてお話しさせて頂く機会が多いというだけでなく、毎年、「知事への政策提言」という形で学生の意見を聞きコメント頂いており、時には県政に反映して頂くなど、埼玉大学と深くつながって下さっています。演題は「夢は逃げない。道は近くにある。」いつもどおり熱く語って頂きます。新埼玉大生の皆さんにとって、埼玉大学における最初の素晴らしい出会いになるものと思っています。

さあ、新たな時間軸の始まりです。大学での生活は皆さんの長い人生の中でとても重要な時期、しかも新たな時間軸原点からの限られた最初の4年間です。埼玉大学において、学問や師、良き仲間と出会い、つながるとともに、常に人間らしく考えることを意識して下さい。そして、知ること、見ること、問うこと、考えること、対話すること、判断すること、実行すること、といったワクワクする行為を十二分に楽しんで下さい。皆さんが充実した大学生活を送り成長して行かれることを、最後に心から祈念して、私の式辞とします。

平成31年4月8日

埼玉大学長 山口宏樹